

目次

凡例	三
「おくのほそ道」本文	
1 漂泊の思ひ	七
2 旅立ち	七
3 草加	八
4 室の八嶋	九
5 仏五左衛門	九
6 日光	一〇
7 黒髪山	一〇
8 那須野	一一
9 黒羽	一二
10 雲巖寺	一三
11 殺生石より蘆野の里へ	一四
12 白河の関	一五
13 須賀川	一六
14 花かつみ	一七
15 信夫の里	一八
16 佐藤庄司が旧跡	一八
17 飯塚の温泉	一九
18 笠嶋	二〇
19 武隈の松	二二
20 仙台	二二
21 壺碑	二三
22 末の松山	二三
23 塩釜	二四
24 松嶋	二五
25 雄嶋	二六
26 瑞巖寺	二七
27 石の巻	二七
28 平泉	二八
29 光堂	二九
30 尿前の関	三〇
31 最上の庄へ	三〇

32 尾花沢	三二
33 立石寺	三三
34 大石田	三三
35 最上川	三三
36 羽黒山	三四
37 月山より湯殿山へ	三四
38 鶴岡	三七
39 象潟	三七
40 越後路	四〇
41 市振の宿	四〇
42 有磯海	四二
43 金沢	四三
44 多太神社	四四
45 那谷寺	四四
46 山中温泉	四四
47 曾良との別れ	四四
48 全昌寺	四四
49 吉崎の入江	四四
50 北枝との別れ	四〇
51 福井	四〇
52 敦賀	四〇
53 種の浜	四〇
54 大垣	四〇
55 跋	四〇
「おくのほそ道」関係俳文	
1 「草の戸も」前書	五三
2 「秣負ふ」前書	五三
3 秋鴉主人の佳景に対す	五四
4 「田や麦や」前書	五五
5 野を横の前書	五五
6 「落くるや」前書	五五
7 「早苗にも」の句文	五五
8 「かくれ家や」前書	五五
9 「さみだれは」前書	五五
10 文字摺石	五五

11 「笠嶋や」前書……………六〇

12 松嶋ノ賦……………六〇

13 「嶋々や」前書……………六三

14 天宥法印追悼……………六三

15 玉志亭懷紙……………六四

16 銀河ノ序……………六四

17 「葉欄に」前書……………六六

18 桂下園家の花……………六七

19 紙衾の記……………六九

「おくのほそ道」関係連句

1 「葎おふ」の巻……………七一

2 「風流の」の巻……………七四

3 「めづらしや」の巻……………七七

「おくの細道」解説……………八一

「おくの細道」足跡略図……………八一

表紙——蕪村筆「奥の細道画卷」より（逸翁美術館蔵）

一 李白の「夫天地者万物之逆旅、光陰者百代之過客」夫レ天地ハ万物之逆旅ナリ、光陰ハ百代之過客ナリ（古文真宝後集）「春夜宴桃李園序」による。西鶴の「日本永代蔵」にも「されば天地は万物の逆旅、光陰は百代の過客」とあり、「はくたい」「くはかく」とふりがなする。

二 昔の詩人・歌人。芭蕉の尊敬した古人のうち、李白・杜甫・西行・宗祇はいずれも旅の途上に死んでいる。

三 芭蕉はこの旅の前々年から前年にかけての旅で、鳴海・伊良古崎・和歌浦・須磨・明石などの海辺を歩いている。

四 川のほとりのあばら家。隅田川のほとりの芭蕉庵のこと。

五 白河の関。蝦夷（えぞ）警固のために設けられた古関はすでに廃絶し、関跡はつきりしなかつたが、歌枕として知られていた。

六 次の「道祖神」と対をなす。人を旅に誘う神の意か。

七 道の守護神。旅人を守る神。

八 灸をすえる場所の名。膝頭の下所。

九 宮城県の松島。日本三景の一。

一〇 杉風の別宅。杉風は日本橋小田原町の魚類商鯉屋。杉山氏。芭蕉の門弟で、当時四十三歳。（一六四七—一七三二）

一一 表八句。百韻または五十韻連句の初表（しよおもて）の八句。

一二 陰暦三月二十七日。

「おくのほそ道」漂泊の思ひ・旅立ち

「笠嶋や」前書……………六〇

「嶋々や」前書……………六三

天宥法印追悼……………六三

玉志亭懷紙……………六四

銀河ノ序……………六四

「葉欄に」前書……………六六

桂下園家の花……………六七

紙衾の記……………六九

「おくのほそ道」関係連句……………七〇

「葎おふ」の巻……………七一

「風流の」の巻……………七四

「めづらしや」の巻……………七七

「おくの細道」解説……………八一

「おくの細道」足跡略図……………八一

一 月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらえて老をむかふる物は、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず。海濱にさすらへ、去年の秋江上の破屋に蜘蛛の古巣をはらひて、やゝ年も暮、春立る霞の空に白川の關こえんと、そゞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取もの手につかず。もゝ引の破をつゞり、笠の緒付かえて、三里に灸すゆるより、松嶋の月先心にかゝりて、住る方は人に譲り、杉風が別墅に移るに、

草の戸も住替る代ぞひなの家
面八句を庵の柱に懸置。

弥生も末の七日、明ぼの空朧として、月は在明にて光おさま

一「論語」に「子曰、剛毅木訥、近仁」(孔子曰ク、剛毅木訥、仁ニ近シ)(子路第十三)とあるのによる。

二陰曆四月一日。陽曆五月十九日に当る。

三平安時代初期の僧である弘法大師。日光山の開基は空海でなく、延暦年間(七八二〜八〇六)勝道上人による。空海が勝道に頼まれ補陀落山の碑文(性霊集)を書いたことによる誤伝か。また空海が二荒山を日光山と改称したともいわれる(『日本賀濃子』)。

四「輝く」は当時「カカヤク」と読むのが普通。

五士農工商の四種の職業の民。

六この句の初案は『曾良俳諧書留』によると、「あなたふと木の下暗も日の光」、再案は「日光山に詣(前書)、あらたふと木の下暗も日の光」(真蹟懷紙)。「日の光は太陽光であるとともに地名の日光を詠みこむ」。

七男体山の別名。

八この句は『曾良俳諧書留』に見られない。芭蕉在世中の他の諸書にもないので、芭蕉

の代作かとも思われる。「黒髪山」は山の名に剃り捨てた黒髪の意味を重ねる。

九芭蕉庵の近くに住んでいたことをいう。出羽国由利郡(秋田県由利郡象潟町)の名所。日本海から入りこんだ入江で、東西二・二キロメートル、南北三・三キロメートル。松の生えた小島が多く、松島に似ていた。現在は土地が隆起し、陸地になっている。三八ページ参照。

二「力あり」はもととも歌合(うたあわせ)の評語。句合(くあわせ)にも用いれる。この場合、「衣更」が単に季節の衣をかえるの意だけではなく、僧衣にかえた意味を含んでいることをいう。

三李白の「飛流直下三千尺、疑は銀河落九天」(飛流直下三千尺、疑フラクハ是レ銀河ノ九天ヨリ落ツルカト)(『聯珠詩格』他「望廬山瀑布二首」)による。

四裏見の瀧。華嚴瀧・霧降瀧とともに日光三名瀑の一。

五「那須」は那須野原。下野国那須地方(今、栃木県那須郡)。「黒ばね」は、大関増恒の城下町(栃木県那須郡黒羽町)。

六あとに出てくる「浄坊寺何がし」や「其の弟桃翠」。

一剛毅木訥の仁に近きたぐひ、氣稟の清質尤尊ぶべし。 圓の書出

二卯月朔日、御山に詣拜す。往昔此御山を二荒山と書しを、空海大師開基の時、日光と改給ふ。千歳未来をさとりに給ふにや。今此御光

一天にかゝやきて、恩沢、

八荒にあふれ、四民安堵

の栖、穩なり。猶憚多

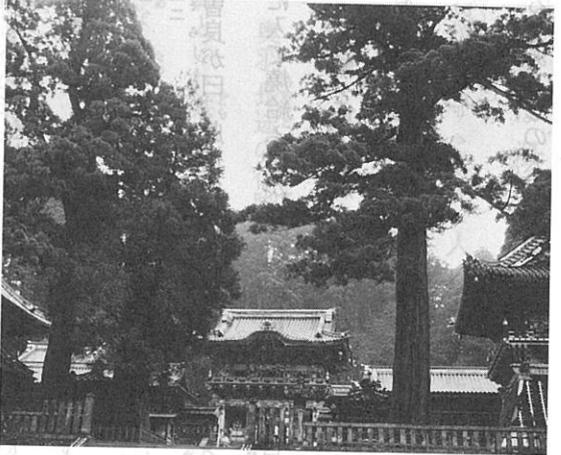
くて筆をさし置ぬ。

六あらたうと

青葉若葉の

日の光

七黒髪山は霞かゝりて、



日光(東照宮)

雪いまだ白し。

八剃捨て黒髪山に衣更

曾良は河合氏にして、惣五郎と云へり。芭蕉の下葉に軒をならべ

て、予が薪水の労をたすく。このたび、松しま、象潟の眺共にせん

事を悦び、且は羈旅の難をいたはらんと、旅立暁、髪を剃て墨染に

さまをかえ、惣五を改て宗悟とす。仍て黒髪山の句有。衣更の二字、

力ありてきこゆ。

廿餘丁山を登つて瀧有。岩洞の頂より飛流して百尺、千岩の碧潭

に落たり。岩窟に身をひそめ入て滝の裏よりみれば、うらみの瀧と

申傳え侍る也。

一四暫時は瀧に籠るや夏の初

那須の黒ばねと云所に知人あれば、是より野越にかゝりて、直道を